



Pediatric restless legs syndrome diagnostic criteria: an update by the International Restless Legs Syndrome Study Group

Daniel L. Picchietti

Sleep Medicine 14 (2013) 1253–1259

この論文には診断基準が記載され、また小児における診断の注意点が記載されています。

レストレスレッグス症候群のための 国際的レストレスレッグス症候 群グループ同意した**診断基準**

レストレスレッグス症候群（ムズムズ脚症候群）は神経学的に感覚運動障害であり、度々かなりの睡眠障害を来す疾患であり、**下記の全てからなる症状を確認することによって診断される。**

- (1) 足を動かすよう訴えるが脚に不快感や不愉快感がいつもあるとは限らない^{a,b}

- (2) 脚を動かすよう訴えて同時に不愉快な感覚は安静時または横になったり座っていたりして活動をしていないときに始まったりまたは悪化する。
- (3) 脚を動かすように訴えて、どんな併発する不快感でも部分的、全体的に動かすことによって少なくとも活動(動かすこと)が持続している限り軽減される。例えば歩行(ウオーキング)やストレッチ^c。
- (4) 安静時や非活動時の脚を動かすように訴えて不愉快な感覚を伴うときは昼間よりも夕方または夜に生じるか悪化する^d。
- (5) 上記の事象は他の医学的または行動(例; 筋肉痛、静脈うっ血、脚浮腫、関節炎、脚痙攣、位置不快

感、脚を軽く叩く習慣)に対する一時的な症状として説明するものではない。

レストレスレッグス症候群の臨床的な意味の修飾子
レストレスレッグス症候群の症状は社会的、職業的、教育的、あるいは、睡眠、エネルギー、活動性、毎日の活動、行動、認知、気分に対するインパクトによって明らかな苦痛と障害をもたらす。

レストレスレッグス症候群の臨床的経過の修飾子

- (A) **慢性-持続性レストレスレッグス症候群: 治療されていない時点の症状は過去1年間に少なくとも平均一週間に2回以上の症状がある。**
- (B) **間歇的レストレスレッグス症候群: 治療されていない時点での症状は一週間に2回未満で少なくとも過去5回ある。**

a 時々不快な感覚がなくて脚を動かすように要求したり、時々脚に加えて腕や他の身体の部分が含まれることがある。

b こども達にとってこれらの症状は子ども自身の言葉で表現されるべきである。

C 重症である場合活動による軽減に気づかないかもしれないが、以前にあった。

d 重症である場合夕方と夜の悪化に気づかないが以前にあった。

e これらの条件は度々“レストレスレッグス症候群もどき”として参照され、特に上記の基準にほぼ合致する。

そのリストにはいくつかの例があり、疫学的研究と実地臨床において特に重要であると記されてきた。

しかしながらレストレスレッグス症候群もまたこれらのどの条件でも起こるかもしれない、他の感覚からレストレスレッグス症候群の明確な描写が要求される。

f 臨床的な経過の基準は小児の例では適用されない
または妊娠や薬剤によるレストレスレッグス症候群
のような特別な例では頻度が高いが、誘発の期間が限
定されている。

小児のレストレスレッグス症候群診断 における特別な考慮

小児は自分自身の言葉でレストレスレッグス症
候群の症状を述べなければならない。

診断する人は小児や青年がレストレスレッグス
症候群を表現する典型的な言葉をしておく必要
がある。

言語と強調運動の発達が年齢よりもレストレス
レッグス症候群診断基準の適応を決定する。

臨床経過のための大人の仕様が小児のレストレスレッグス症候群に適用できるかどうかは解らない。

成人においてと同様睡眠、気分、協調、昨日での有意のインパクトが見つかっている。しかし障害は行動や教育領域においてよく見られる。

おそらくそして可能性のある小児レストレスレッグス症候群のための単純化した最新の研究基準が使用できる。

周期的な四肢運動障害がある症例ではレストレスレッグス症候群の診断に先行することがある。